

五 検証考察

(一)(二)四省略

(四) 到達基準を達成するための対策

① Aグループにおいて仮商修正する場合、初めから念頭操作させるのではなく、手順を確実に理解させるために、一つずつ修正しその形跡を残させたので、計算ミスが少なく効果があった。

② Bグループにおいては、個別指導をしても、再評価において効果がみられなかった。個別指導の工夫の必要性を感じた。

(六) ① 形成的評価問題の問題数が五問の場合は、正答率の基準はよい。

資料3 形成的評価の到達度 (問題・基準)

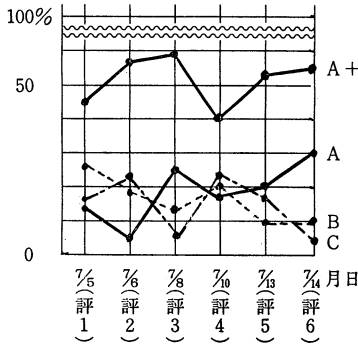
形成的評価 No.	問題	A +	A	B
1	① 80÷40 ② 280÷70 ③ 470÷50 ④ 950÷300 ⑤ 3785÷400	100%	80%	60%
%		5問正答	4問正答	3問正答
4	① 674÷93 ② 228÷23 ③ ②の検算 ④ 817÷43 ⑤ 721÷12	100%	80%	60%
%		5問正答	4問正答	3問正答

資料4 形成的評価4の到達状況

No.	氏名	2位数÷2位数=1位数 2位数					到達状況	到達予測	到達度	つまずきの内容と治療		再評価	
		①	②	③	④	⑤				内容	治療	114÷14	817÷43
1	/	/	/	/	③	/	A	A	+	ひき算	自力訂正	/	/
2	/	/	②	△	△	/	C	A	-	商のたて方	個別指導	①	②
3	/	②	/	△	①	①	C	A	-	"	"	①	②
4	/	/	/	/	/	/	A+	A	++			/	/
5	/	①	①	△	①	①	C	B	-	商のたて方	個別指導	/	/
6	/	/	/	/	/	/	A+	B	++			/	/
7	/	/	/	/	/	/	A+	A	++			/	/
8	/	/	/	/	/	/	A+	A	++			/	/

誤答分析
除法の手順に従い
誤答分析を5つに
分類した
①商をたてる段階
②かける段階
③ひく段階
④おろす段階
△無答

資料5 形成的評価問題の到達状況の変容



(七) 省略

(八) 形成的評価問題の到達状況の変容

① 変容として顕著にとらえることができるのは、A段階である。このことから、中位層に効果があつたことが言える。

② 個別指導を行ったC段階については、あまり効果がみられなかった。

③ 教師側が到達予測を設定し、一人一人がどこまで到達すればよいかを設計した。しかし、児童は、それを知らされていないので、すべての児童が完全解答をねらっている。

② 問題数が、三〜四問の場合にはBの正答率が低すぎる。

(九) 省略

(十) 事前、事後テストに対する伸び率の変容

① 事後テストにおいては、到達度B以上は90%に到達した。出席番号、五十七、二十一、三十一番においては誤答の分析とよいねいな指導を継続する必要がある。

② 事前、事後テストの伸び率をみると、①の結果と一致し、四名は、三十〜五十五と低い。事後、把持テストに対する到達度とその変容 (資料7)

① A段階以上に到達した者は、事後テストにおいては全体の75%、把持テストにおいては80%である。

(十一) 把持テストが事後テストより良かった理由の一つは、夏休みの課題の学習のためである。
② 出席番号五については、今後、意欲づけとよいねいなステップを考慮した再指導に心がけたい。
毎時の授業に対する感想とその変容 (資料8)

① 三項目とも、到達度A⁺が増加していることがわかる。
② 形成的評価の結果からだけでなく、これからも個別指導を必要とされる児童が判別できる。